

海外レポート

海外でふれたマイムの世界

野田はるか

2010年7月下旬から8月初旬にかけての約2週間、私は国際発信力育成インターナショナルスクール若手研究者等海外派遣プログラムの助成を受け、ドイツ・ミュンヘンで開催された国際演劇学会に参加し、フランス・ペリグーの第28回国際マイム・フェスティバルを視察した。私の研究対象であるマイムは、いわずもがな欧米諸国にその起源をもつ。だがこれまで私は、欧米圏の本格的なマイムの上演を目の当たりにすることもないまま、日本で研究を続けてきた。そのため、今回の海外派遣は演劇研究や実践の場におけるマイムの現状を知る上で、非常に有意義なものとなった。本レポートでは、それぞれの大会で得られた個人的な成果について報告したい。

1. 国際演劇学会の参加と発表

国際演劇学会 (International Federation for Theatre Research) とは、演劇研究における最も権威のある学会のひとつである。大会には世界44カ国から研究者や院生が集まり、500近くの研究発表がおこなわれるなど、その規模も最大級といえよう。今年度は、ドイツのミュンヘン大学 (Ludwig-Maximilians-Universität München) において、7月25日から31日までの約1週間にわたって開催された。日本からも著名な先生方が多く参加され、大阪市立大学からは文学研究科の小田中章浩教授、またアジア都市研究科後期博士課程の岡戸香里さんが参加し、研究発表を行なわれた。

今回の学会で私が掲げた目標は、研究発表を通じて自身の研究を海外に発信すること、そのフィードバックを得ること、海外におけるマイム研究の現状や演劇研究におけるその認識について把握することなどであった。まず、私は若手研究者枠 (New Scholars Forum) において “Butoh and Corporeal Mime: Alternative Thoughts on the Modern Concept of the Body” と題した10分間の研究発表をおこなった。研究発表の内容は、現代マイムの父 Étienne Decroux (1898-1991) によって提唱されたコーポリアル・マイムと、土方巽 (1928-1986) によって確立された舞踏の技法を比較し、現代の身体表現の系譜の見直すことであった。発表内容に関しては、

フロアから多くの貴重な助言や批判を頂く事ができた。なかでもコーポリアル・マイムに関する博士論文を執筆された Anna Thuring 先生とは後日お話しする機会に恵まれ、今回の発表で取り上げた作品の選択や、Decroux の哲学の理解に至るまで、これまでにない専門性の高い具体的な批判を頂戴することができた。Thuring 先生は他にも、今後の研究のためのヒントや、文献に掲載されていない貴重な情報などもご教示下さった。先生との出会いはこれから研究を進めていく上で大変な刺激となった。

また今大会では偶然にも、メイン・プログラムでもコーポリアル・マイムについての研究発表がおこなわれていた。発表された Joel Anderson 先生はコーポリアル・マイムの専門家ではなかったが、これまでの先行研究にはない新しい観点からコーポリアル・マイムを論じられ、私自身もとても勉強になった。発表後には Anderson 先生と個人的にお話しでき、コーポリアル・マイム研究の現状についてのご自身の見解を伺うこともできた。

学会への参加を通じて私は、国際的な研究の場においてマイム研究がまだまだ少数派であると実感した。しかし、多数派か少数派かということに関らず、自身の研究は他の研究者との繋がりをもつものであるということ、そしてそのような繋がりの中で、自分の研究に対し責任感をもたなければならないと感じるようになった。だがその一方で、世界に発信し他の研究者たちと対等に議論するにあたって、克服すべき課題も痛感することとなった。とりわけ英語の運用能力、コミュニケーション能力、そして演劇研究に関する知識・教養については猛省することとなった。自身の研究が国際的な広がりをもつものである以上、国際学会は今後の研究を進めていく上で重要な場である。それを再認識するとともに、これからの自身の研究活動を考える上でも、貴重な機会を頂けたように思う。

2. 国際マイム・フェスティバルの視察

ペリグー国際マイム・フェスティバル (Festival International du Mime de Perigueux) は、ロンドン国際マイム・フェスティバルと並ぶ大規模かつ重要なマイム・フェスティバルである。今年で28回目を迎えるこの祭典は、過去にマルセル・マルソー、ジャック・ルコックといったマイムの大家も出演しており、大野一雄や室伏鴻といった舞踏家の大御所もしばしば招待されている。今回のフェスティバルでは40組近くのパフォーマーたちが街頭でそれぞれ芸を披露し、劇場では特別に招待されたパフォーマーによる有料の公演が行なわれた。

ペリグーは、フランス南部アキテーヌ地方の小都市である。人口はおよそ2万9600人、パリからは鉄道で5時間近くかかり、多くのフランス人にとっても馴染みの薄い街である。だが大会が公表しているデータによると、大会期間中は延べ4万5000人も観客がペリグーにつめかけるといふ。実際、期間中はどんなに小さな演目にも何十人も観客がかけつけ、街中は活気に満ちていた。



マイム・フェスティバルの様子（撮影：報告者）

大会期間中、私は上演された殆どのパフォーマンスを鑑賞し、広報の責任者や地元の住民にインタビューをおこなったり、大会運営会議を傍聴したりして、可能な限りの情報収集につとめた。そうした活動を通じ、私はこのマイム・フェスティバルが現在の「マイム」に対して果たしている役割の大きさを実感した。

広報責任者 Marie-Jo Picot-Mourgues 氏がインタビューの中で語ってくれたように、多種多様な演目を揃えたこのフェスティバルには、「このフェスティバルを通じてマイムの概念を拡大させよう」と意気込みに溢れていた。大道芸やコンテンポラリーダンスなど広い意味でのノン・バーバル・パフォーマンスはもちろんのこと、言葉を用いた喜劇（スタンド・アップ・コメディなど）や器楽演奏、アジアやアフリカの伝統芸能、無声映画とロックミュージシャンのライブによるコラボレーションなど、とても地方のマイム・フェスティバルとは思えないほど、そのプログラムは充実していた。しかも、こうした一連のパフォーマンスは、フェスティバルを通して何万人もの観客に受け入れられ、親しまれていた。これほどの規模でマイムが愛され、革新的な作品ですら受け入れられるような環境は、マイナーなパフォーマンスに留まっている「マイム」を発展させていく上で、貴重な土壌となるはずである。

同フェスティバルではまた、後進の育成にも力を注いでいるようであった。大会運営会議においてもこの点は

強調されており、若手パフォーマーたちに上演機会を与えたり、学校をつくったりといったことが活潑に議論されていた。今回のフェスティバルにおいても、大人や子どものためのワークショップが開催されたり、発表会が設けられたりするなど、様々な試みがなされていた。こうした点からも、このフェスティバルが現代のマイムに対して与える影響力がうかがえる。

だが情報収集を進めていくにつれ、私はこれまでマイム研究において繰り返されてきたある問いに、立ち返ることとなった。「マイムとは何か」という問題である。先述のとおり、ペリグー・マイム・フェスティバルは「マイム」という一般的概念にとらわれない、幅広いジャンルのパフォーマンスを提供してきた。その一方で、少なくとも今大会では、いわゆるパントマイム（白塗りのピエロが身振り手振りでコメディを演じたりする等）や、コーポリアル・マイムに代表される現代マイムは、メイン・プログラムからはほぼ完全に除外されていた。そもそも、「マイムとは何か」という問題意識が、素通りされてしまっているような印象さえ残った。

大会運営のあるスタッフに尋ねたところ、上記のようなパントマイムやコーポリアル・マイムは、もはや「時代遅れになってしまった」という。確実に観客を動員するために、そうした「古典」的なマイムを顧みないのは、ごく自然な選択ではある。実践の場においても、「マイムとは何か」という問いが未だに解決をみていないという、マイムをとりまく現状の一端がうかがえるようであった。

3. 今回の海外派遣をふりかえって

今回の海外派遣を経て、私はマイム研究の必要性を、ようやくアクチュアルなものとして認識できるようになった。インタビュー中、Picot-Mourgues 氏も語っていたが、マイムとは現代のパフォーミング・アーツにとって重要なテクニックであると同時に、パフォーマンスとしての強度が低く、定義の難しい表現形態でもある。それゆえ、演劇研究や実践の場においてマイムはその実践面での価値を一応認められながらも、依然として曖昧なものとして扱われている。だが、今後「マイム」を「マイム」として認識していくためにも、マイムとは何か、学術的に問いつづける必要性を実感した。

学会での発表、また国際マイム・フェスティバルを経験したことで、私はようやく本格的なマイム研究の一步を踏み出すことができたように思う。今回の海外派遣プログラムに大いに感謝するとともに、今後も更なる研究活動に邁進していきたい。